



上越新幹線で長岡まで行ってバスに乗り換えてまず日本海沿いの米山を目指す。米山下山後はバスで2時間以上かけて内陸部にある五頭山麓へ移動して翌日に備える。

ツアーリーダーは植草パパとスキーインストラクターが本職という湯川さんである。毎日新聞旅行には宮代さんや萩原さんなどスキーインストラクターを本職とする人が多い。ツアー登山とはシーズンが分かれるためか両立しやすいのかも知れない。前2回は植草ママのお世話になって今回はパパの番である。ずいぶんと長い付き合いになるが、私より4歳くらい年長と思えるが元気なものである。全く年を感じさせない。一方私の方は近年めっきり体力が落ちてきた、情けなや。メンバーは男7人に女10人。若い方のFジタさんや札幌から来るHラダさんがいる。米山が300名山であるのでそれ狙いの人がいっものように集まっている。その他にも何人かいつも見る顔がいる。

① 米山

300名山の米山は993mの山にしては結構急登である。しかもそれが最初から終わりまで続く。途中にゆるやかな登りという過程がない。この日は28℃というこの季節にしては猛暑であったので、汗びっしょりになった。柏崎市にとっては米山というのはポピュラーな扱いの山らしく、平日なのに登山口の駐車場には数台の車が合った、この辺の人たちはず



いぶんきつい山でもものともせず好んでいるようである。

この山にはもう一つ珍しい特徴があるようだ。古い三角点と新しい三角点が共存しており、一等三角点としては日本で 3 か所しかないということである。そんなことを確かめるために登る人さえいるということである。新一等三角点には GPS 用のセンサーが埋め込まれており、このような技術革新というのは、なるほど“進歩だなあ”という感覚を覚えるが、携帯電話や原子力の分野など“何が進歩だい！”というものも多い。今は三角測量屋さんという職業はあるのかなあ。関係ない話であるが、劔岳の測量を扱った映画“劔岳 点の記”の映画監督の木村大作さんは私の家の近くにお住いのように、私が山登りと映画が好きであることを知っている床屋のオヤジさんが“今、隣にいたお客さんは木村大作さんですよ”と教えてくれたことがある。散髪の中もしょっちゅう携帯電話が掛かってきたり掛けたり忙しいジイサマだった。

この日の宿泊は毎日新聞旅行としては珍しく洋式のホテルであり全客個室であった。おかげで部屋へ引き上げてからもワンカップ焼酎 2 本を平ら上げてしまって五頭山の登頂に少なからぬ影響があった。

② 五頭山 (913m)

前日の猛暑から一転して朝から雨であった。雨の方はたいした降りではなかったが風が強くて稜線では吹き飛ばされるような勢いであった。このため予定の菱ガ岳 (974m) を経由する周回コースを変更して五頭山のピストンになった。稜線には雪の残るところも多かったが、アイゼンのご厄介になるほどのことはなかった。

